

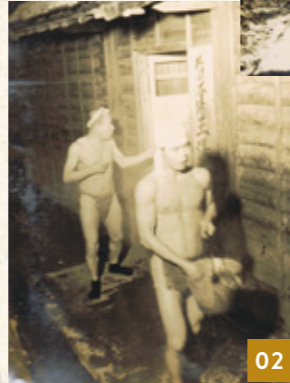


03. 王湯の前での湯のかけあいの様子。かつては王湯と笹湯の湯をかけあい、ふんどしも白だけだった(昭和20年代に紅白に分かれて湯かけ合戦をやるようになった)。



01

呼び出し太鼓(01)に合わせて、いざ出陣!(02)。



02

昭和中頃

旧温泉街での湯かけ祭り



05



06

05. 祭り名物「湯かけ太鼓」は昭和55年頃に作られたもので、それにとめない簡易舞台も用意されるようになった。06. 旧温泉街では向かいの高台から見下ろすことができた。



04

04. 湯をかけることは厄をおとすお清めの意味があることから、地域内の家や見物客も容赦なく湯をかけられた。たいていは喜ばれたが、なかには気性の激しい人が度を越すこともあり、トラブルや喧嘩になることもあったとか!

ころ、ふたたびお湯が湧き出したので、「おゆわいた」「お祝いだ」と湯をかけた喜びました。これが天下の奇祭、湯かけ祭りの始まりとされています。

お年寄りから話を聞くと、昔の祭りはもっと荒々しく野蛮なものだったそうです。見物客を含め誰かれかまわずお湯をかけ、特に参加者を出していない家(温泉街に住む家からは、長男もしくは男子を必ず一人は参加させなければなりません)などには集中して湯をかけられ、凍って扉が開かなくなってしまう家もありました。お湯をかけるのは厄除けの意味があり、全員で参加することに意義があったのです。明治の初めに「こんな野蛮な祭りはやめよう」と中止したところ、疫病が流行り亡くなる人も出たため、祭りは復活、戦争中も行われていたそうです。昭和50年代に観光協会が発足して以降、湯かけ太鼓が演奏されたり、舞台を作って神事としての儀式を整えたりして、地域外からも見物客を招く観光行事としての側面に力を入れるようになりました。

ダム建設に伴い、2015年から現在の王湯前に会場を移転。さまざまな時代による変遷を経て、来たる1月20日、祭りは平成最後の開催を迎えることとなります。

湯かけ祝ひ
一月二十日(午前五時頃より七時頃まで)の年中行事、これによって温泉神社に、其一年土地の無事を祈り、又繁榮を希ふものと傳へられて来た奇習。



昭和初期以前の祭りの様子が描かれた絵葉書。よく見ると男衆や子供たちに混じって女性も一緒にかけ合っている。



vol.22 天下の奇祭「湯かけ祭り」と 頼朝ゆかりの伝説の大石

〔川原湯温泉〕

毎年1月20日に開催される川原湯温泉の湯かけ祭り。ふんどし姿の男たちが「お祝いだー!」と叫びながら盛大にお湯を掛け合うこのお祭りは、今では天下の奇祭として知られ、大勢の見物客やカメラマンが集まります。平成最後となる今年のお祭り。あらためて歴史や由来をおさらいしてから出かけてみませんか?

一年でもっとも寒い頃である1月20日、早朝5時。湯かけ太鼓とともに湯の神様に感謝を捧げる神事が始まります。そこに登場するのが松明を掲げたふんどし姿の男たち。神事に続いて紅白にくす玉に一齐にお湯をかけ、中から飛び出してきたニワトリを奉納し、独特の手締めを行って祭りは終了します。

言い伝えによると、今から400年ほど前、突然温泉が出なくなりました。困った村人たちは、温泉が茹で卵の匂いが出るのでニワトリを生け贄にして祈ったと

新天地での湯かけ祭り

平成29年



◎今回紹介したのは…川原湯温泉 湯かけ祭り・衣掛け石

参考資料：「長野原町誌」「長野原町の民俗」、豊田拓司氏による聞き書き資料、「山木館『樋田家』歴史」

ふるさと 再発見

[22]

—文化財だより—

新パワースポット誕生！ 【久々戸遺跡敷石住居跡】

上で貴重な資料と判断され、現地での保存が難しかったため、住民総合センターエントランスロビー床下に移築しました。住居の構造や規模、移築状況は現地で解説しているのではありません。石棒は男根を模した祭祀具と考えられています。意図的に壊されたり、焼かれたりしている例が多く、完形で見つかることは珍しいです。縄文人も「子孫繁栄」を願ったということでしょう。

次号は【熊川】をご紹介します。



04



02



03



01

01. 昨年8月に発見された巨石。高さは2.8メートルあり、大人の背の高さをゆうに上回る。02. 頂点が一部削られているのは、工事の際に邪魔になったからだろうか。03. 周囲から欠片も見つかり、すでに石がだいぶもろくなっていることがわかる。04. 明治時代の写真には、王湯の前にはっきりと石の姿が確認でき、「周囲五十尺高さ十尺」の「神代石」と紹介されている。

幻の大石発見！

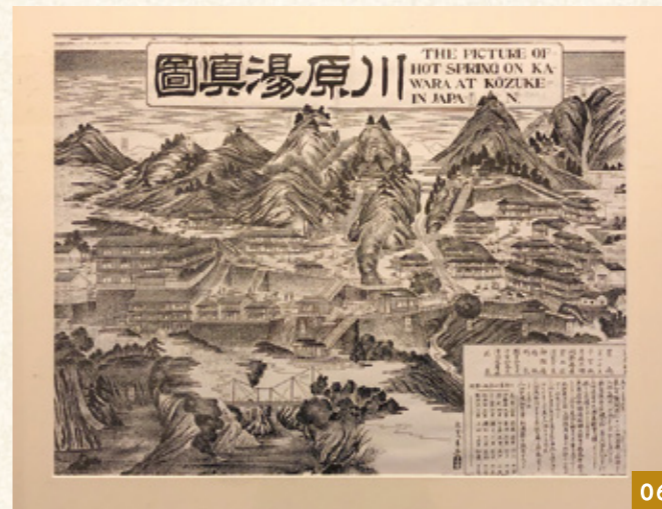
90年ぶりに姿を現した頼朝ゆかりの「衣掛け石」！

昨年8月、ダム湖岸の公園予定地工事現場から、高さ2・6メートル、周囲10メートル、推定約35トンの巨石が掘り出されました。その場所は、旧温泉街の共同浴場「王湯」があった場所のすぐ近く。石の大きさもさることながら、地域住民が驚いたのには理由があります。

伝承によると川原湯温泉は、浅間山麓で狩りをした源頼朝がこの地に立ち寄り温泉を発見したといわれています。かつて、王湯の傍らには大きな石が地中から顔を覗かせていて、これは頼朝が入浴する際に脱いだ衣をかけた石「衣掛け石」だと伝えられてきました。明治・大正生まれの方たちはこの石のことを覚えてい

て、「しめ縄が飾られていた」「上に登ってよく遊んだ」と話します。昭和5年頃、この近くで大雨による土砂崩れが起き、その後の道路拡張工事の際、石は地中に埋められてしまったため、その後に生まれた住民にとっては伝説上の幻の存在でした。それが今回、約90年ぶりに姿を現したのです。

昨年10月には地元住民を招いた見学会があり、住民からは「川原湯のシンボルであり、活かすことはできないか」という要望もあげられましたが、石がもろくなっており、動かすことは難しいとして、ふたたびその場に埋め戻されました。川原湯温泉の800年の歴史を物語るようなロマンを感じる発見でした。



06



05

江戸時代(05)と大正時代(06)の絵図にはそれぞれ、王湯(大湯)の近くに巨大な丸い石が描かれており、その当時からシンボルであったことがよくわかる。江戸時代には「大石」、大正のほうでは「玉石」または「玉石」という名称になっている。王湯の正式な表記は玉湯とも書くが、大石=玉石の湯が玉湯になったのではないかという説もある。